

夕焼けチャイムがあなたのまちへ届けるもの

調査課 九鬼 統一郎（狛江市派遣）

1. はじめに

2020（令和2）年4月に発令された緊急事態宣言以降、新型コロナウイルス感染症（以下「新型コロナ」という。）の感染防止や外出自粛を呼び掛けるアナウンスが各地で放送されていたことを覚えている方は多いのではないのでしょうか。振り返ると、2023（令和5）年5月に新型コロナが5類感染症に移行するまでの間、そのアナウンスは正午や夕刻などに流れており、特に夕刻時のアナウンスの後は、メロディが流れていたことを思い出します。

筆者が勤務する当調査会は、府中市と小金井市の市境に位置しており、16時台から17時台にかけて、日没を知らせるメロディが聞こえます。そのメロディは筆者自身の“ふるさと”をどことなく想起させる親しみのあるメロディに感じられます。この夕焼けチャイムには、自治体がそのような想いを込めて放送しているのでしょうか。

そこで本稿では、生徒等の下校時刻に流れる声の放送とは異なる、この夕刻に防災行政無線から流れる音色（以下「メロディ」という。）を「夕焼けチャイム」と呼ぶこととし、その意義や多摩・島しょ地域自治体等の実態を調査しました。

2. 夕焼けチャイムについて

はじめに防災行政無線について触れておきましょう。総務省によると「防災行政無線は、県及び市町村が『地域防災計画』に基づき、それぞれの地域における防災、応急救助、災害復旧に関する業務に使用することを主な目的とし

て、併せて、平常時には一般行政事務に使用できる無線局」¹とされています。

市町村防災行政用無線は、1978（昭和53）年1月に発生した伊豆大島近海地震の際に、市町村内の集落が孤立したため情報の伝達収集に支障を来したことが発端となり国庫補助²を行うこととされました。2022（令和4）年度末時点の市町村防災行政無線等の整備状況は、全国1,333/1,741自治体（76.6%）、都内61/62自治体（98.4%）³（筆者注：御蔵島村は1990年に村有無線放送施設を新設し、現在使用している）となっています。

都内における防災行政無線から流れる放送が始まった時期について、多摩地域の三鷹市は、1982年7月から無線装置の動作確認のために放送⁴しています。また、特別区の北区は1983年2月から子どもたちへの帰宅時間の目安として、放送⁵しています（当時、4～9月は18時、10～3月は17時）。

それから40年余りが経過した多摩・島しょ地域の現在を調査しました。

1 総務省「防災行政無線とは・市町村防災行政無線のデジタル化」
<https://www.soumu.go.jp/soutsu/kyushu/ru/prevention.html>（2024年6月3日確認）

2 総務省 昭和56年情報通信白書.p76（2024年6月3日確認）

3 総務省 電波利用ホームページ <https://www.tele.soumu.go.jp/j/adm/system/trunk/disaster/change/index.htm>（2024年6月3日確認）

4 三鷹市ホームページ（よくある質問と回答）https://www.city.mitaka.lg.jp/c_faq/062/062890.html（2024年6月3日確認）

5 北区ホームページ（夕焼けチャイムについて）https://www.city.kita.tokyo.jp/shogai_renkei/kosodate/kyoiku/chime.html（2024年6月3日確認）

3. 多摩・島しょ地域アンケート結果

多摩・島しょ地域自治体の実態を把握するため、夕焼けチャイムの現状等についてアンケート調査を実施しました。

多摩・島しょ地域自治体アンケート調査
 対象自治体：多摩・島しょ地域39市町村
 調査基準日：回答日時点
 実施時期：2024年3月19日～4月19日

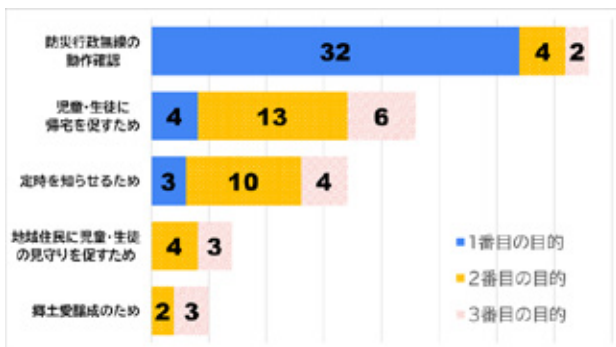
以下は、アンケート結果の概要についてまとめています。

(1) 夕焼けチャイムの目的について

図表1は夕焼けチャイムの目的をまとめたものです (N=39、複数回答 最大3つまで)。

これによると、98.2%の自治体が「防災行政無線の動作確認」を目的に夕焼けチャイムを放送していることが分かりました。そして、「児童・生徒に帰宅を促すため」は59.0%、「定時を知らせるため」は43.6%でした。

▼図表1 夕焼けチャイムの目的

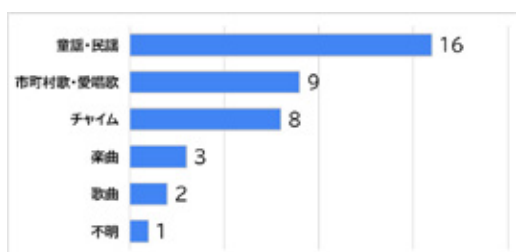


目的の順位は下がりますが、「地域住民に児童・生徒の見守りを促すため」や「郷土愛醸成のため」を目的としている自治体が1割以上あることも分かりました。

(2) 夕焼けチャイムのメロディについて

図表2は、夕焼けチャイムのメロディを音楽種別（筆者独自分類）にまとめたものです。(N=39、単一回答)

▼図表2 各自治体のメロディの種類



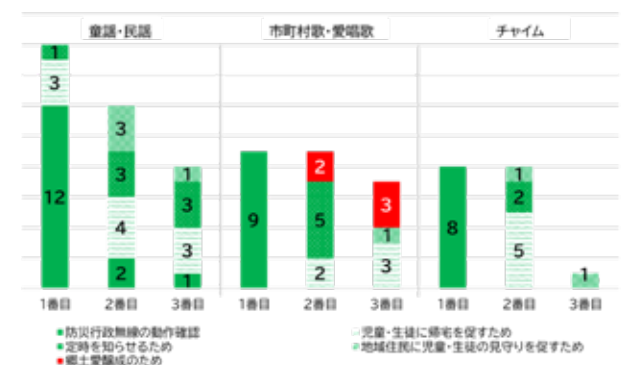
放送されている主要なメロディですが、童謡・民謡では「夕焼け小焼け」や「赤とんぼ」、チャイムでは「ウェストミンスター寺院の鐘」、楽曲では「家路」などが見られました。

メロディの種類は、童謡・民謡を放送している自治体が16自治体 (41.0%) と最も多く、2番目は自治体が制定した市町村歌や地域住民等に親しまれている愛唱歌が9自治体 (23.1%)、3番目にチャイムが8自治体 (20.5%) となりました。

(3) 夕焼けチャイムの目的とメロディの関係性について

夕焼けチャイムのメロディにより、目的が変化するかを見るため、図表1と図表2の上位3項目について、クロス集計したものを図表3にまとめました (N=16 (童謡・民謡)、N=9 (市町村歌・愛唱歌)、N=8 (チャイム)、複数回答 最大3つまで)。

▼ 図表3 メロディ種別の夕焼けチャイム目的



メロディ種別で見ると、1番目の目的はいずれの場合も「防災行政無線の動作確認」が最も高い割合となっています。

2番目、3番目の目的を見ると、童謡・民謡は「児童・生徒に帰宅を促すため」と「定時を知らせるため」、市町村歌・愛唱歌は「定時を知らせるため」、チャイムは「児童・生徒に帰宅を促すため」の割合が高くなっており、メロディの種類によって目的に差異が見られました。

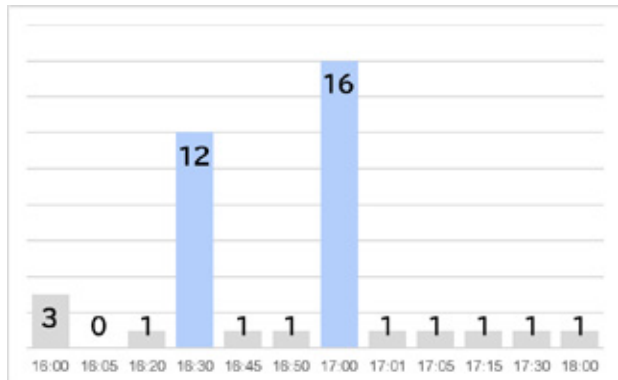
また、「郷土愛醸成のため」という目的を選択したのは5自治体となっており、そのメロディ種別は全て「市町村歌・愛唱歌」となっています。

(4) 放送する時間帯について

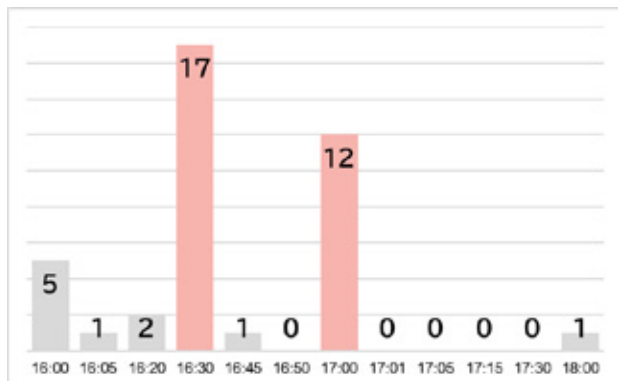
図表4、5はそれぞれ3月と11月の放送する夕刻の時間帯をまとめたものです（N=39、複数回答、夕刻のみの時間を月ごとに集計）。

放送時刻の時期は自治体により異なる結果となったため、放送時刻の種類が最も多い月（3月）と少ない月（11月）を選定しました。

▼図表4 放送時刻別の自治体集計（3月）



▼図表5 放送時刻別の自治体集計（11月）



放送時刻は、いずれの場合も16時30分と17時に集中していることが分かりました。

詳細に見ると、3月の放送時刻は、16時台が18自治体（46.2%）、17時台が20自治体（51.2%）となり、11月の放送時刻は、16時台が26自治体（66.7%）、17時台が12自治体（30.8%）となりました。

そして、30分又は00分の時間帯の放送は、3月は33自治体（84.6%）、11月は34自治体（87.1%）となりました。

この理由として、図表1から夕焼けチャイムを放送する目的が「児童・生徒に帰宅を促すため」や「定時を知らせるため」としている自治

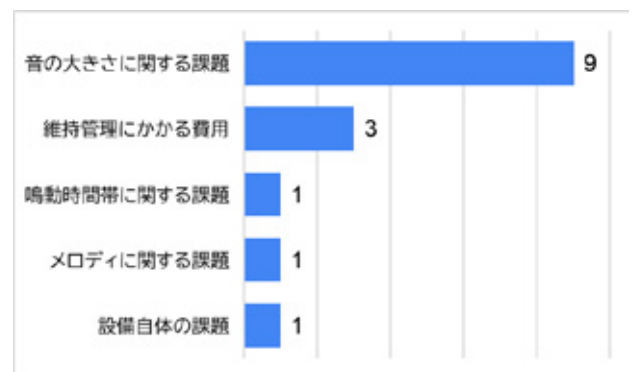
体が多いため、日没の時刻⁶に合わせる、区切りの良い時刻に放送していると読み取れます。

(5) 夕焼けチャイムの課題について

最後に、夕焼けチャイムを放送するにあたり、課題の有無、課題がある自治体については、その課題内容を尋ねました。

課題が「ある」とした自治体は12自治体となっており、その課題内容を図表6にまとめました（N=12、複数回答）。

▼図表6 夕焼けチャイムの課題内容



音の大きさに関する課題が大多数となっていますが、維持管理にかかる費用が課題であることも分かりました。

4. 事例紹介

はじめに、住民から寄せられた夕焼けチャイムの課題と向き合った事例をご紹介します。

(1) 夕焼けチャイムの課題と向き合う

（千葉県富津市）

富津市は、房総半島の中西部に位置する人口40,827人（2024年4月30日現在）、西部は海、南部は山と自然に囲まれています。海岸沿いは工場地帯であり、若年層の転入が見られていますが、山沿いは集落となっています。

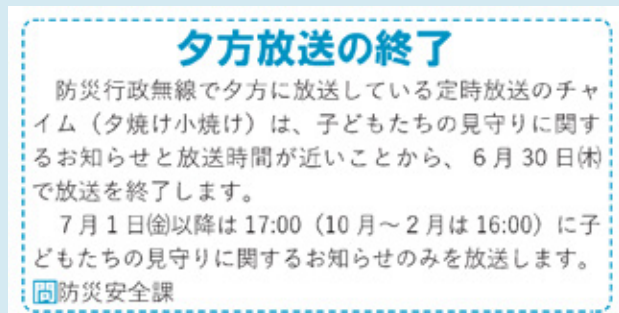
2022年5月に1通のメールが担当課に寄せられました。内容は、防災行政無線から夕刻2度流れる放送の回数を減らしてもらいたいというものでした。

⁶ 3月 17:48、11月 16:35 いずれも2023年各月末日の日没時刻（国立天文台公表データ）

当時、富津市で17時（11～1月は16時、10・2月は16時半）に児童・生徒の帰宅時の見守りを地域住民へ促すことを目的としたアナウンスが放送され、正午と18時（10～2月は16時）に防災行政無線の動作確認を兼ねる試験放送（正午はウェストミンスターの鐘、18時は夕焼け小焼け）を放送していました。

この住民からの意見を受け、担当課はすぐに検討を行いました。住民の様々なライフスタイルの変化等にも考慮しつつ、夕方放送（本稿でいう夕焼けチャイムのこと。以下同じ。）の目的は、防災行政無線の動作確認を行うものであったことから、児童・生徒に対し帰宅時刻を促すこと、そして地域住民に児童・生徒への見守りを促すことを目的としたアナウンスのみを行うこととし、夕方放送を6月末で廃止することを1週間程で決定しました。

▼図表7 夕方放送の終了お知らせ
（広報ふつつ令和4年6月号）



<出典>富津市HP 筆者一部加工

廃止については、富津市安全安心メールに登録されている方へのメール配信、市内107地区ある区に対する区民向け回覧文書の配布、広報ふつつ等で周知を行いました。

そうしたところ、住民から「昔から慣れ親しんだチャイム（本稿でいう「メロディ」のこと。

以下同じ。）がなくなるのは名残惜しい」「穏やかな町の雰囲気なくなってしまう、とても寂しい」と言った夕方放送が無くなることを惜しむ声が多数寄せられました。

この住民の声を受けて、担当課は改めて検討を行い、7月1日からは、アナウンスとチャイムを併せた形で17時（10～2月は16時）に同時放送することを決定しました。

市担当課の夕方放送を行う目的に変更はありませんが、地域住民にとって、ライフスタイルの変化等を考慮しつつ、長年慣れ親しんだチャイムであることや活動の目安時刻にしていると言った、地域に暮らす様々な住民の実態も踏まえ、多角的な視点から検討がなされた結果となりました。

現在でも依然として音の大きさに関する課題は存在しています。それらについては、それぞれ代替策を講じながら、住民と対話を重ねて課題を解決しています。

現時点ではデジタル機器を所有していない方も多くいることから、防災行政無線や夕方放送の廃止については検討していませんが、ライフスタイルの変化と共に形を変えながらも、地域住民の生活に溶け込んでいます。

続いて、夕焼けチャイムのメロディに市町村歌を放送し、郷土愛を醸成することを目的としている事例を2例ご紹介します。

（2）プロ演奏家による市歌の放送（稲城市）

稲城市は、東西、南北にそれぞれ約5.3km、面積約18km²の多摩地域南部に位置する人口93,878人（2024年5月1日現在）の自治体です。

2021年11月に市制施行50周年を迎えるにあたり、「みんなで祝い、紡ぎ、広めよう」をテーマに前年度から準備を行いました。実施事業は、市民とともに祝う周年事業とするため、一部は市民提言から採用することにしました。

その市民提言から採用した事業の1つが「市歌制定」事業です。市歌制定にあたっては、より市民参加を意識した事業とするため歌詞、曲を全国から公募し、それぞれ有識者等から構成される稲城市市歌策定委員会（以下「委員会」と市長の審査を経て、2021年11月に制定されました。

2021年3月に提出された委員会の提言書では、市歌を広めるためのしかけづくりの1つとして「防災行政無線の流す音楽としての活用」が明記されました。これを踏まえ、2023年3月に、これまでの「夕焼け小焼け」から「稲城市

歌」に変更しました。

そして、同年9月には稲城市歌オルゴールver.から市にゆかりのあるプロの演奏家グループである「iMUSICA (アイムジカ)」が演奏するアンサンブルヴァージョン (iMUSICA演奏ver.)へ変更されました。

iMUSICAは、2015年に結成され、今年で10周年を迎える演奏家グループです。メンバーはいずれも市内若しくは近郊に在住しており、元東京交響楽団首席チェロ奏者である西谷牧人氏をリーダーとし、小杉芳之氏 (ヴァイオリン・読売日本交響楽団)、武生直子氏 (ヴィオラ・東京交響楽団)、石川浩之氏 (コントラバス・読売日本交響楽団)、原博美氏 (ピアノ・ソロ) の5名で構成されています。市が運営する複合文化施設「稲城市立iプラザ」の公演を皮切りに活動を始め、市制50周年記念式典の記念公演では、稲城市ゆかりの楽曲の演奏を行いました。

記念式典は、三密回避のために限られた職員のみでの出席でしたが、演奏を聴いた職員が皆、iMUSICAの演奏に心を打たれ、何か一緒に事業を行うことが出来ないかと考えました。

そこで、市歌のアンサンブル放送が珍しく、普及に効果的であること、優しい音色の再現が期待されたこと、そして「稲城市のため」という想いで弾いて頂ける一流奏者の存在をPRするため、iMUSICAに音源制作を依頼することとなりました。

放送するにあたり、細やかな音質、音量設定を何度も重ね、現行のiMUSICA演奏ver.が完成しました。市民からも演奏の良さを褒める声ももらっているこの夕焼けチャイムは、17時になると市内一斉に優しい市歌のメロディを奏でています (2024年5月14日時点)。

▼図表8 稲城市公式キャラクター 稲城なしのすけ



<出典 稲城市提供>

(3) 市民等から集めた市のイメージフレーズを歌詞にした市歌のメロディ放送 (小金井市)

小金井市は、東西、南北にそれぞれ約4.0km、面積約11km²の東京都のほぼ中央に位置する人口124,677人 (2024年5月1日) の自治体です。

小金井市では、2018年10月に市制施行60周年に合わせて、市歌『光さす野辺』と市民愛唱歌『夢みる町』を制定しました。

作詞は、郷土愛を深めてもらうため、市への想いやフレーズなどを市内公共施設に設置した意見箱や市内小中学校の生徒から集め、それらの言葉を市観光大使であった林望氏 (作家・国文学者) に作詞を、市歌の作曲は信長貴富氏 (作曲家) に依頼し、格調高いメロディにしました。そして、市民愛唱歌の作曲は深見麻悠子氏 (国立音楽大学非常勤講師) に依頼し、親しみやすいメロディにしました。

市歌の普及を図るため、一般向けに市報や市ホームページ等を通じて周知を行いました。制定後5年目の節目となる2023年度には、更に市歌、市民愛唱歌の認知度を向上させるため、「協働事業提案制度」の行政提案型協働事業として、「小金井市歌の普及」をテーマに募集を行いました。行政提案型協働事業とは、あらかじめ市が公共的課題 (テーマ) を設定し、その課題を解決するため、団体からの提案をもとに、市と事業を実施する手法です。その結果、複数団体から応募があり、市民委員を含む外部委員等から構成する市民協働推進委員会の意見を参考とし、庁内委員会で1団体を選出しました。

選出された「はけの手アニメーション」は、アニメーションを通じて地域と繋がり、アニメーション文化の普及活動を行っているアニメーション作家集団です。

昨年度は、子どもたちを中心に楽しんでもらえるよう、作家とともに絵を描くワークショップの開催や次年度に作成するミュージックビデオに使用するために「小金井の風景ぬり絵」の募集を行い、今年7月21日にはそのぬり絵をアニメーション化して作ったミュージックビデオ

の上映、ぬり絵などの展覧会を行う予定です。

▼図表9 イベントチラシと市歌ミュージックビデオ公式キャラクター はけむしちゃん



<出典 小金井市提供>

市では、市歌の更なる普及のため、2023年12月から市の電話保留音を内蔵メロディから市歌のオルゴールバージョンに変更し、2024年4月からは「ふれあいメロディ」（本稿でいう夕焼けチャイムのこと。）を市歌メロディに変更しました。

2013年6月から放送されている「小さな世界（イツ・ア・スモールワールド）」は、市観光大使である黒田哲平氏（ピアニスト）が中学生の時に演奏をしたもので、これまで多くの住民に親しまれてきました。そのため、市歌メロディに変更することによる住民の反応に不安もありましたが、住民にも親しんでもらえるように様々な楽器音源の中から、内部で好評だったギター2本が奏でるメロディとしました。変更して1カ月経った今、住民からは良い音色だ、と好評価を受けています（2024年5月17日時点）。

今後も市歌に対する愛着を高め、郷土愛を育むため、制定月である毎年10月には、住民が多く来庁する市第2庁舎の入口で市歌の混声合唱を放送するほか、市立小中学校への様々なアプローチを通じて子どもたちにも届けたいと考えています。

5. おわりに

本稿では、夕焼けチャイムの歴史や多摩・島しょ地域の実態、自治体の事例を紹介しました。

夕焼けチャイムを放送する主たる目的は「防災行政無線の動作確認のため」としている自治体が大多数であり、東日本大震災の教訓を生かし、有事に備えた日々の設備点検が必要なことは言うまでもありません。

しかし、社会の変遷と共に、住民のライフスタイルも変容しており、そのことへの配慮も必要となっています。

一方、夕焼けチャイムのメロディは、児童・生徒への帰宅を促す、地域住民の方へ見守りを促すという目的から馴染みのある童謡・民謡にする、郷土愛を醸成する目的から、住民に親しみを持ってもらえる音源にした市町村歌・愛唱歌にしている自治体も見られました。

これらは、毎日同時刻に放送するからこそ、多くの地域住民にとって心地よく、受け入れられるメロディにしていると筆者は考えます。

夕焼けチャイムで放送されている童謡・民謡「七つの子」「波浮の港」などの作詞者である野口雨情は、活躍期に武蔵野市吉祥寺北町で暮らし、墓所は小平霊園（小平市）にあります。また、「夕焼小焼」の作詞者である中村雨紅は、八王子市上恩方町高留の生まれであり、野口雨情に師事していたなど、共に多摩地域と深い関わりがあります。このような背景を知ると、放送されているメロディは、とても身近に聞こえるのではないのでしょうか。

何気ない日々の夕暮れ時、あなたの働くまち、あなたの住むまちの夕焼けチャイムは、どのようなメロディが聞こえてきますか。

夕焼けチャイムは、地域で暮らす住民に、そのまちを訪れた方に、それぞれのふるさとを届けるため、今日も優しい音色を奏でていきます。

<参考文献>

- 東京都御蔵島村（教育委員会）（2016）御蔵島島史.ぎょうせい.p893
- 平輪光三（1987）野口雨情.日本図書センター.p161
- 武蔵野文化協会（2020）武蔵野辞典.雄山閣.p550-551
- 小林弘忠（2002）『金の船』ものがたり.毎日新聞社.p268
- 八王子市史編纂委員会（1980）八王子市史 上巻.八王子市.p1290